
国家の存亡をかけて

怠惰なぼっち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

国家の存亡をかけて

【Nコード】

N2900BA

【作者名】

怠惰なぼっち

【あらすじ】

注意

この物語はフィクションです。作品内の登場人物、地名、場所等は全て架空の物です。予めご了承下さい。
また作品は中世をモチーフにしています。

プロローグ

注意

この物語はフィクションです。作品内の登場人物、地名、場所等は全て架空の物です。予めご了承下さい。

また作品は中世をモチーフにしています。文章が変になっている所もあると思いますが、温かい目で見てやってください。

昔々、ある国でのお話です

その国は平和な時代が続いていた国でした

国王が死ぬまでは

この小説は、そんな波乱の国の中でも国の、民のために戦い抜く騎士達のお話

第1話 誇りある騎士団（前書き）

重要な話の時は話数だけでなくサブタイトルもつけます。

第1話 誇りある騎士団

メルディアズ王国はメルデナ王家による統治から1000年以上の歴史を持つ国である。

国王は国民の事を憂い、国内を統治する良き支配者として他国の者でも評判である。

そんな国に生まれた一人の男がいた

「だーから、一次試験受かったんだって!」

「あのなあ、いくらもう歳だからってわしに嘘をつくような真似は……」

「いやいやいやいや、これ見てくれよ!」

その男の手には、確かに一次試験合格の通知があった。

「ね、つーことで、家業は継がなくて良いよね?」

「ダメだ!断つて来い!」

「な、何で!?息子が夢を叶えられるんだぜ?そこは快く……」

「ダメだ!お前が継がなかったら誰がここを継ぐんだ?」

「ユラがいるんだからいいじゃねーか」

「あのおな、武器屋が女に務まるわけがないだろ…」

「お父さん、それは失礼なんじゃない？」

「な！、ユラ、いたのか！？」

「私が武器屋は継ぐからさ、お兄ちゃんにはお兄ちゃんの夢があるんだし」

「さすが俺の妹。話が分かるやつで助かる」

「…そこまで言うなら、認めてやるっ」

「よっしゃー！！！！！！」

「大丈夫なの…？」

第2話 城下町の事件

「メルディアズ王国王都城下町にて」

「ざけんじゃねーぞっ!」

「うるせー!手前がやってきたんだろーがー!!!」

「また喧嘩?」

「最近多いよな、こついうの」

「とりあえず騎士呼べ騎士」

メルディアズ王国王都城下町では以前は少なかった暴行事件等が増えていて、王都の住民達は不安になっている。

「ほらほら、何やってんの?」

「コイツが俺にぶつかってきやがったんだ!」

「お前が先だろうが!」

「まあまあ、落ち着いて...」

「うるせー!」

ボカッ!

「おいそいつ取り押えろ！」

「ちょっと屯所に連絡しろ！」

2人だった騎士だったが1人の騎士が殴られるといつのまにか7、8人になっていた。

「ちょっと向こう行つて」

「はいはい押さないでー」

騎士を殴った男は騎士に取り押えられ、騎士団の馬車に乗せられた。

〈翌日の王都新聞〉

「最近こういう事件多いよなあ……」

「お兄ちゃん、本当に騎士になるの？」

「当たり前だろ、それで親父にも無理言っちゃったんだし」

「ふーん。ところで、二次試験って明日でしょ？大丈夫なの？」

「ああ、大丈夫。今のところ病気だとかも無いし、二次試験は楽勝だろ」

「ふーん……」

第3話 二次試験

「じゃあねお兄ちゃん、行つてらっしゃーい」

「頑張れよアレス。」

「行つて来ます…っと」

（試験会場）

「2次試験の内容は、体力検査だ。基準に満たしていない場合は不合格となる」

「まあ、楽勝だろ…」

結果

合格

「よっしゃー……………!!!!!!」

「よかったね、お兄ちゃん」

「ああ、これで俺もはるばる騎士になれるんだが…」

「まずは騎士団養成所だろ…」

「あそこいじめとかすごいんでしょー？頑張つてね！」

「その日の夜・城下町騎士団屯所」

「はあ、最近事件とか多いなあ…」

「騎士の数も増やしてく予定らしいぜ？」

「まあ、多いほうがいざとなったときいいんだけどさ…」

「あの一すみません」

「どうかしましたか？」

「あつちで集団の殴り合いがあつて」

「じゃあ大屯所の方に連絡しといて、俺は向かってるから」

「了解。」

「翌日」

「また事件か…」

「今度は集団同士の殴り合い？最近はどうなってるんだか」

「これが、まだ大事件への布石だと誰が気付いたのだろうか…」

第4話 騎士団養成所

〔騎士団養成所〕

堅苦しい挨拶も終わり、寮生活が始まった。養成所では騎士になる為の訓練や研修が行われる。

その期間は1年間。短いような、長いような期間である。

俺は寮の自分の部屋に行った。

1部屋には4人が共同生活を送ることになる。

ガチャ 覚悟を決め部屋に入った。

「どうも」

「いえいえ、こちらこそ」

「はじめまして」

「こちらこそはじめまして」

部屋に入ると律儀そうな奴が1人、気さくそうな奴が1人、無口で無愛想な奴が1人いた。

「よお！これからよろしくな！」

「ああ、よろしく」

「名前何て言うんだ？俺はロジエって言うんだけど」

「私はルギと言います。他の方は？」

「俺はアレスって言います」

「…ケラ」

「じゃあ、これからよろしくな！」

「ええ、よろしく」

「王都城下町」

「また新聞読んだ？」

「ああ、読んだ読んだ、集団の喧嘩で20人が負傷、騎士が120人出動だっけ？」

「最近物騒だよなあ…何か悪いことの前触れじゃなければ良いんだけど」

「ああ…」

第5話 国王の死

「ゴホッ！ゴホッ！」

「陛下！大丈夫ですか！？」

「ゴホッ…私はもうダメだ。ロイを呼んでくれ…」

「わ、分かりました！」

「父上…」

「ゴホッ！ロイ、跡継ぎとして、メルディアズ王国の良き執政者として…」

「父上！何を仰るのですか！」

「ゴホッ！ゴホッ！」

「父上！父上！」

「……」

「そんな…父上…」

「ロイ様、王位継承の式の準備、それから陛下についての…」

「ああ、分かっている…」

「では…」

「すぐに準備をしろ、このことはすぐに国民に知らせるんだ」

「分かりました」

「それから、大臣達の動きに警戒していてくれ」

「分かりました」

「クソッ…どうして…」

第6話 国内に走る衝撃

〽翌日、王都城下町王城広場前〽

「なあ、ロイ様からの重大な発表って何だ？」

「さあ？悪いことじゃなければ良いんだけどさ」

「それより、朝から騎士が色んな所にいるんだけど、何かあったのかな？」

「さーねー？」

「おっ、出てきたぞ」

ツカツカ

「えー、昨夜遅くに、国王陛下が…亡くなられた」

ザワザワ ナンデ… ハイカ…

「既に陛下の息子である、ロイ様が次の王として王位を継承される」

「それでは、ロイ様からの挨拶である」

〽その頃の、騎士団養成所〽

「既に知っていると思うが、国王陛下がお亡くなりになられた。」

「そこで、騎士団の仕事は増えると思われる。」

くアレス家く

「…」

「…どうするんだろ…」

この時、この国が少しずつ傾いているのを誰も知らなかった…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2900ba/>

国家の存亡をかけて

2012年1月8日21時53分発行